

シニア

古写真で時をたどる

◆◆5◆◆

鎌倉時代のある時、
博多の承天寺で年の瀬
を越せない町人に「世
直し蕎麦(そば)」と
称して蕎麦餅が振る舞
われた。すると、翌年
からみな運が向いてき
たそうだ。それから、
その地方では大みそか
に蕎麦を食べる習わし



ができた。
江戸時代になると、
麦切り」が流行した。

せいろで出す「蒸し蕎
麦」が流行した。

その頃には、長く伸び
るので延命長寿、切れ
物として、年越し蕎麦

の習慣が庶民に定着し
たそうだ。とはいって
も、安く健康にも良
い蕎麦は、大みそかで
なくともいつでも気軽に
食べられていた。

蕎麦の値段は、文政
年間(1818~30)

年間(1865~68)に20

文、次いで24文とな
り、明治になると5厘

る。

(日本カメラ博物館)

井桜直美

庶民が気軽に食べた蕎麦

江戸時代になると、
麦切り」が流行した。

その頃には、長く伸び
るので延命長寿、切れ
物として、年越し蕎麦

の習慣が庶民に定着し
たそうだ。とはいって
も、安く健康にも良
い蕎麦は、大みそかで
なくともいつでも気軽に
食べられていた。

蕎麦の値段は、文政
年間(1818~30)

年間(1865~68)に20

文、次いで24文とな
り、明治になると5厘

る。

(日本カメラ博物館)

井桜直美

突然の不幸で混乱したまま葬儀会社に依頼してしまい、思っていたような見送りができなかつた。元気な時から葬儀について話し合う機会があれば、こうしたトラブルは避けられる可能性がある。全国の葬儀会社でつくる全日本葬祭業協同組合連合会(東京都港区)の松本勇輝専務理事は「最近の終活ブームもあって、事前相談で葬儀会社へ足を運ぶことに抵抗を感じる人が減つてきました」と話す。

「自分がどんな葬儀で送られたいか」を基に場所や参列者に出す料理、着せてほしい衣装などを

考えるだけでもいい。松

本さんは「自分や家族が重い病気になるなどして必要に迫られてからの相

談になると、かえって話しづらくなれる」と語る。

財産処理や葬儀などに

ついて希望を記す「エン

ディングノート」も知ら

れるようになつたが、「葬儀が全て終わり、遺品を片付けている時にノートが見つかることが意

外に多いです。保管場所を家族に伝えておく必要があります」と松本さん。後で気付くと、家族に後悔が残ることもある。

店舗や事務所を持たず、電話での取り次ぎの業者もあり、支払金額などでトラブルになつても連絡がつかなくなるケースもある。「地元で暮らしている場合は、帰省などで家族がそろつた時に話し合う機会を持つのもいい。参列者の数を複数回り、事前相談で簡単な見積もりを頼むと

店舗を構えて長年葬祭業を営んでいるような会社

の葬儀で済ませた後、喪中はがきなどで知った知

人が後から次々に訪れ

た方がいいでしょう」と

店舗を構えて長年葬祭業を営んでいるような会社

の葬儀で済ませた後、喪

中はがきなどで知った知

人が後から次々に訪れ

た方がいいでしょう」と

店舗を構えて長年葬祭業を営んでいるような会社

の葬儀で済ませた後